

令和 2 年 7 月 11 日現在

機関番号：95401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04063

研究課題名(和文) 満洲引揚体験の記憶化に関する歴史社会学的研究

研究課題名(英文) Historical Sociology on Collective Memory and Regional Sociology on Collective Memory of Repatriates from "Manchukuo"

研究代表者

猪股 祐介 (Inomata, Yusuke)

特定非営利活動法人社会理論・動態研究所・研究部・研究員

研究者番号：20513245

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：まず長野県は「満蒙開拓平和記念館」と、舞鶴は「引揚記念館」を、博多は福岡市運営のウェブサイト「引揚港・博多」のスタッフを対象に、インタビュー調査を行った。その結果まずその語り部については、満洲体験をいかに記憶化しているかを明らかにした。また過去のインタビューや日記・体験記等における「過去の記憶化」と「現在の記憶化」を比較し、その変容を明らかにした。満洲引揚体験という難民体験が、国家権力への不信等を通じて平和運動と結びつく可能性があったことを明らかにした。また満洲引揚体験における被植民者による「襲撃」等を、侵略・植民地支配の帰結と捉えて、これを自省する契機となった可能性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで満洲移民体験は空襲・原爆などと並ぶ敗戦体験として、日本の敗戦を強調する戦争体験とされてきた。しかし満洲引揚体験の聞き取り体験者などはそうとは限らないことが判明した。敗戦直後の難民生活が平和運動につながる可能性があった。また敗戦直後の現地住民による襲撃などの加害体験は、その背景となった加害体験への自覚につながった。満洲移民体験が被害者意識の戦争体験を形成するのではなく、難民体験に根ざし反戦思想や自らの侵略性への気付きにつながったことは、日本の反戦思想を解明する上で大きな成果があったといえる。

研究成果の概要(英文)：First, Nagano Prefecture conducted an interview survey with the Mangaku Pioneer Peace Memorial Hall, Maizuru with the "Retirement Memorial Hall", and Hakata with staff from the Fukuoka City website "Retired Port/Hakata." As a result, first of all, regarding the storyteller, it was made clear how the experience of Manchuria was memorized. In addition, the changes were clarified by comparing the "remembering of the past" and "remembering the present" in past interviews, diaries, and experiences.

It was clarified that the refugee experience of Manchurian withdrawal could be linked to the peace movement through distrust of state power. He also identified the "attack" by the settlers during the Manchurian repatriation experience as a consequence of the invasion and colonial rule, and clarified the possibility of self-reflection.

研究分野：歴史社会学

キーワード：満洲移民 満洲引揚者 反戦運動 難民生活 反権力思想 侵略性の自覚

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

#### 1. 研究開始当初の背景

2000年代以降、日本の敗戦前後の引揚げに関する研究は飛躍的な進歩を遂げた。その背景には、冷戦体制の崩壊後、日本のマルクス主義歴史学が退潮し、日本人の戦争の「被害者性」の研究が容易になったことがある。マルクス主義歴史学では、アジア・太平洋戦争は日本帝国主義による侵略であることを実証し、その加害者性について研究が深められてきた。しかし日本人内部の加害・被害関係は等閑視されてきた。引揚者は「加害者の被害者」であるがゆえに、研究対象とされてこなかったと言える。

#### 2. 研究の目的

本研究の目的は、アジア・太平洋戦争の満洲引揚体験（シベリア抑留を含む）が、引揚直後から現在までにおいて、いかに記録され解釈されてきたかについて、体験者の語りおよびそれを語り継ぐ社会運動を分析することで、明らかにすることである。

それにより、満洲引揚体験の記憶化が単なる「被害者意識」の形成に留まらず、侵略・植民地支配の「加害者意識」の形成を伴っていること、そしてそれが平和運動に結実したことを明らかにする。なお長野・舞鶴・博多を事例とするのは、「満洲引揚体験の記憶化」が盛んな地域だからである。

#### 3. 研究の方法

##### A. 長野・舞鶴・博多における満洲引揚者および関係者へのインタビュー調査

長野県は「満蒙開拓平和記念館」と「満蒙開拓を語り継ぐ会」、舞鶴は「引揚記念館」を、博多は福岡市運営のウェブサイト「引揚港・博多」のスタッフを対象に、インタビュー調査を行う。

##### B. 戦後日本の平和運動に関する文献調査

満洲引揚縁故者による社会運動は、専ら引揚者による賠償請求運動と結び付けられてきた（浅野、2004）。しかし満洲引揚体験という難民体験が、国家権力への不信等を通じて平和運動と結びつく可能性がある。このような仮説に基づき文献資料を分析する。

##### C. 戦後日本の歴史認識に関する文献調査

戦後日本の歴史認識に関しては既に分厚い先行研究がある。それらに共通することは、戦後日本の戦争の記憶は、侵略・植民地支配の加害を忘却し、空襲・原爆・引揚げ等の被害に偏っているという指摘である。しかし満洲引揚体験における被植民者による「襲撃」等を、侵略・植民地支配の帰結と捉えて、これを自省する契機となった可能性がある。このような仮説に基づき文献資料を分析する。

#### 4. 研究成果

アジア・太平洋戦争の引揚体験が、引揚直後から現在までにおいて、いかに記録され解釈されてきたかを、長野・舞鶴・博多を事例に明らかにするために、研究期間内に以下のインタビュー調査と文献調査を行う。それにより、平和運動における引揚体験の記憶の位置付け、および戦後日本の歴史認識における引揚体験の記憶の位置付けを明らかにした。

##### A. 長野・舞鶴・博多における満洲引揚者および関係者へのインタビュー調査

長野県は「満蒙開拓平和記念館」と「満蒙開拓を語り継ぐ会」、舞鶴は「引揚記念館」を、博多は福岡市運営のウェブサイト「引揚港・博多」のスタッフを対象に、インタビュー調査を行う。

まずその語り部については、彼ら・彼女らが満洲体験をいかに記憶化しているかを明らかにする。また過去のインタビューや日記・体験記等における「過去の記憶化」と「現在の記憶化」を比較し、その変容を明らかにする。

次に関係者については、彼ら・彼女らがなぜ「満洲引揚体験の記憶化」に携わるようになったか、また満洲引揚体験をいかに捉えているかを明らかにする。

## B. 戦後日本の平和運動に関する文献調査

満洲引揚縁故者による社会運動は、専ら引揚者による賠償請求運動と結び付けられてきた（浅野、2004）。しかし満洲引揚体験という難民体験が、国家権力への不信等を通じて平和運動と結びつく可能性がある。このような仮説に基づき文献資料を分析した。

## C. 戦後日本の歴史認識に関する文献調査

戦後日本の歴史認識に関しては既に分厚い先行研究がある。それらに共通することは、戦後日本の戦争の記憶は、侵略・植民地支配の加害を忘却し、空襲・原爆・引揚げ等の被害に偏っているという指摘である。しかし満洲引揚体験における被植民者による「襲撃」等を、侵略・植民地支配の帰結と捉えて、これを自省する契機となった可能性がある。このような仮説に基づき文献資料を分析した。

満洲体験者のインタビュー調査は盛んに行われてきた。しかし満洲引揚体験の学術的位置付けは専ら、戦後日本において戦争の被害を強調する記憶として扱われてきた。これに対して、本研究は「引揚げ」に焦点を絞り、戦時性暴力のように、従来の帝国研究や軍事史研究では対象化し得なかった領域に、光を当てるものである。また満洲引揚体験の記憶化が「被害の記憶」を乗り越えて平和運動につながる可能性を探るものである。

予想される結果は次の二つである。第一に、満洲引揚時の戦時性暴力等の「事例」に注目することで、ソ連軍の満洲国侵攻後の「国家権力の空白」により、戦争の加害／被害関係が、ジェンダー・エスニシティ・階層が複雑に絡み合い、形成されたことである。第二に、満洲引揚縁故者による社会運動が、自らの加害者性に気づくなかで、戦争の被害の記憶を越えた平和運動となり得ることである。その意義は次の二つである。第一に、満洲引揚者の被害体験を「日本人の被害」に回収するナショナリズムを克服する理論的枠組みを提示する。第二に、舞鶴引揚記念館の世界記憶遺産登録運動等が、国際社会への訴求力を持つ要件を示す。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 猪股祐介
2. 発表標題 戦時性暴力の「モデル被害者」言説に対する抵抗を見出すために セカンド・レイプ言説による新たな抑圧をめぐる一考察
3. 学会等名 日本社会学会第91回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 猪股祐介
2. 発表標題 満洲移民研究における戦時性暴力の位置付け
3. 学会等名 KUASU学際融合コロキウム
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 上野 千鶴子、佐藤 文香、姫岡 とし子、山下 英愛、岡田 泰平、平井 和子、成田 竜一、木下 直子、樋口 恵子、茶園 敏美、蘭 信三、猪股 祐介	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 384
3. 書名 戦争と性暴力の比較史へ向けて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2016年度アジア研究教育ユニット第5回学際融合コロキウム  
[http://www.kuas.cpi.kyoto-u.ac.jp/research-divisions/seminar/kuasu\\_gakusai\\_2016\\_5th/](http://www.kuas.cpi.kyoto-u.ac.jp/research-divisions/seminar/kuasu_gakusai_2016_5th/)

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----